



another eye

アメリカ人が日本の山奥で見つけた豊かさ

# 時間は自分でデザインする

カリフォルニアで「書く」ことを教えているアメリカ人男性が日本へのツアーを企画した。単なる観光ツアーではない。「意識の奥底を刺激し、目覚めさせ、その潜在能力を解き放つことによって、もっと自由に物を書く」手段としての旅だ。ツアー一行は、山奥に住む日本の芸術家や工芸家と一緒に暮らし、山道を歩いた。一緒に食事をし、自らも作品作りに取り組んだ。快適なホテルとはほど遠い、水洗トイレもシャワーもない生活。アメリカ人参加者はこの旅で何を得たのか。彼らを受け入れた日本人芸術家の「乏しさの中の豊かさ」とは一体何なのか。



※「乏しさの中の豊かさ」は、本ツアーの企画者であり、ライターのアンディ・コチュリエーさんの近刊「A Different Kind of Luxury (もうひとつの豊かさ)」に用いられる章のタイトル。

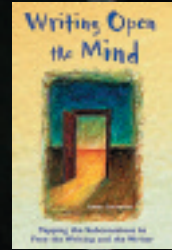
Andy Couturier

カリフォルニア在住で、書くことを教える。ライターでもあり、『The North American Review』、『The Japan Times』などに寄稿。著書に『Writing Open the Mind』がある。また、日本の芸術家達との触れ合いを通して、物質的ではない精神的な豊かさを検証した本、『A Different Kind of Luxury(もうひとつの豊かさ)』が近々出版の予定。



<http://www.theopening.org/>

アンディさんの著書『Writing Open the Mind』。表紙には「潜在意識の中を叩いてみよう。書く能力も書き手も解放されるだろう」とある。



そして、ツアーは始まった

「ツアーを組んだきっかけは、旅をすることと人に出会うこと、私の大好きな2つのことをしたかったからです」とツアーを企画したアンディ・コチュリエーさんは語る。

しばらく住んだことのある日本には「好き嫌いという生ぬるい感情ではなく、激しい愛とその愛があるからこそ生まれる憎しみが共存する複雑な愛憎を抱いている」と笑う。流暢な日本語を使い、日本への理解は驚くほどに深い。

ライターでもある彼は、著書『Writing Open the Mind』の中で、想像と観察を通じて潜在意識を刺激し、書くパワーと自由を得ようと教える。

この旅でも、「参加者には書く喜びと大切さを知ってもらい、それを通じて何が彼らの

人生に大切なのかを考えてもらいたい」と旅の目的を語る。

まったく未知の状況に身を置き、自分を見つめなおす場所として彼が選んだのが、日本の北アルプス地方と徳島県上勝町だった。彼の呼びかけに集まった人は彼の話を聞き、彼のエッセイを読み、彼への信頼を深めた。

「アンディの語る日本とはどういうものか」。そうして様々な背景を持った8人のアメリカ人が集まった。

自分でデザインする  
ゆったりとした時間

無駄をなくし、ゴミを減らす「ゼロ・ウエスト宣言」で、役所と市民が一体となり環境問題に取り組んでいる徳島県上勝町。蛍や阿波番茶でも有名な町だ。

山間をしばらく走り、車を止める。そこからは徒歩だ。短い距離だが急で足場は悪い。滑り落ちそうになりながらあぜ道を登っていくと、一軒の古民家にたどり着く。高台の斜面に位置し、前方に青々とした山が聳え立つ。5月の雨上がりで緑は格別美しい。

ガスも電話もないこの古民家に住むのは中村修さん。アメリカからの客人に本の表紙作りを指導している。ネパールでチベット木版を習得した中村さんが版画にした、美しい幾何学的文様の表紙だ。ミリ単位の正確さが求められる表紙作りには、懸命に取り組む。

台所のかまどでは、近くに住む環境活動家であり、絵付師でもある渡部厚子さんが、ネパールのカラーを用意する。食事のあと、中村さんは囲炉裏に火吹き竹で火をおこし、鉄瓶に湯を沸かす。裏の畑で作った阿波番茶と自家製のお菓子を楽しみながら、座談会。

中村修さん



作品は、お金のためではなく、楽しむため

中村さんは1年に1回、1ヵ月半だけ仕事をする。日本の伝統的な工芸人が集まる施設で五平餅を焼いているのだ。ここ数十年、餅焼きで稼いだお金だけで生きてきた。

自分の作品は一切売らない。「餅焼きの仕事はお金のためだけ。自分が作ったものは自分が楽しむだけ。収入がなく生きることも可能だけど、それも大変。大変なところはお金で解決します。自給自足とはいっても、自分でやれるところまでやって、あとは買ってれば

いい。1ヵ月半くらいならお金のために費やしてもいいかなって思っています(笑)」。現在中村さんは、土間の台所にギャラリーキッチンと称して自分の作品を飾るプロジェクトに取り組んでいる。

「絵を描いたり、版画をしたりすることは楽しいが、それだけでは飽きてしまう。今やっている楽しみが次にどう展開していくのか。楽しむためのアイデアがでなくなったときが自分の最大のピンチではないか」と中村さんは話す。



環境活動家であり、  
絵付師でもある渡部  
さん。土間のかまどに  
薪で火をおこし、手際  
よく料理をする。シナ  
モンやクローブの匂  
いが香ばしい。

囲炉裏で火をおこし、  
鉄瓶でお湯を沸かす。  
お茶を一杯飲むにも  
ゆっくり時間をかける。



表紙作りに取り組む  
カメルンさんとレベッカ  
さん。エレンさんは表紙  
作りの体験をこう語る。  
「最初はなんて緻密で  
スローなんだと思ったが  
できあがると大きな満足  
感が得られた。料理でも、  
作品作りでも、中村さん  
は止まった時を見つけて  
いる。私達が忘れていた  
喜びだ」



ネパール風カレーを  
シェルパ風に手づかみ  
で食べる。

時は止まるかと思うほどゆったりと流れた。  
「来てもらって、この空間の中で思い思いに  
感じてもらえればいい」と中村さんは客人を  
迎えた印象を語る。たまに講演の話もある  
そうだが、「ここに来てもらって感じてもらわ  
なければ意味がない」と断る。

電話はない。来たい時にくれればいい。気兼ね  
はいささいらない。今日しなければならぬ  
ということがない。

「1週間のうちにやればよいとやることを  
決めると、その1週間のうちにはぜったいに  
やれる時間があります。時間に対する考え方、  
使い方がここでは違います。でも、ひまとい  
うわけではありませんよ(笑)。家事、特に食に  
かなりの時間を費やします。畑を耕したり、  
薪をひろったりも食べるためです。ガスは使  
いません。薪だとだいたいこのくらいかかるな  
という時間がわかりますが、それにガスが  
加わってくると計算が狂ってしまい、生活が

複雑になってきます。ここでは時間を自分で  
デザインします。1日、1週間、1年と、自分で  
デザインするのです」

## 放浪中にふと頭に 浮かんだ自分の原点

27歳でサラリーマンを辞めて、日本を出た。  
世界中を放浪しながら、その中から将来への  
指針が見えてくれればいいと思ったが、何も得  
られなかった。

「何も得られないのは旅行がなまめい  
からだと思うようになり、自転車で旅行を始め  
ました。もっと修羅場をくぐりたかった」と  
中村さんは笑うが、修行僧のようにまじめな  
放浪者だったのだ。

アフリカ行きを試みるが入国できずに断念。  
日本帰国を考え、進路を修正。スペイン海岸を  
走っていたときにふと頭に浮かんだ。

「今まで何かを得ることばかりを考えていま  
したが、『捨てる』という考えがふっと頭に  
浮かびました。捨てることこそが大切ではなか  
ろうか。欲を捨てる、いらぬものを捨てる。  
この考えは今も常に頭の中にあり、行き  
詰まったときにはいつもそこに戻ります。  
旅行で得た最大の体験、それは心が帰る  
場所、原点を得たことです」

その後、ネパールでチベット木版画に出会う。  
カトマンズからバスで1時間、そこから徒歩で  
5日かかるエベレストの麓にある寺の宿坊に  
泊めてもらい、版画を習った。その後10年  
ほどカトマンズをベースに生活する。そのうち、  
そこで出会ったシェルパ族(※1)の生活に  
魅せられるようになる。

「日本に帰ると決めた瞬間にこのスタイルを  
日本でもというイメージが決まった」という。  
ネパールで知り合った陶芸家の渡部愚風堂

中村さんがこの家に住んで17年。雑誌やテレビで彼の生活が紹介  
されるようになったのはつい最近のことだ。「自分が変わったのでは  
なく、周りが変わったのです。バブル崩壊以降、物から心への価値  
の転換があり、社会全体が変わったのでしょう」

※1 シェルパ族：ヒマラヤ山脈登山のガイドや通訳、  
宿の運営などを営む、ネパールの高地少数民族。



長さを切りそろえた薪が整然と  
積んである。ガスは生活が複雑  
になるので使わない。

中村さん手作りの阿波番茶と  
お茶菓子。塩味と香辛料のきいた  
インド風お菓子はこんじゃく  
のような形で、別名「ひとひねり」。  
甘いかりんとうとよく合う。



木版はエベレストの麓の  
寺でチベット仏教のお坊  
さんに教わった。緻密で、  
細かい幾何学文様を時間  
をかけ、丁寧に彫っていく。





火吹き竹は大切な道具。筒抜けになった竹は全体に風を送り、小さな穴がある竹はピンポイントで風を送る。

普段は物静かなサムさん(左)だが、旅先ではしばしば自作の歌を披露した。パワフルな歌声と歌詞は聴く人の心を打つ。



「せっかくアメリカから来たのだから」と近所の人が最後の晚餐をご馳走する。パチンコ、自動販売機、そして、朝の7時に役場から聞こえてくる音楽やお知らせの騒音公害など、日本の奇妙な文化に話が盛り上がる。

晩餐后、ハーモニカを吹くアンディ。「こちらから得るだけでなく、こちらからも与え、分かち合いたい」と出会った人との交流や対話を大切に考える。



さん(渡部厚子さんのご主人)の紹介で上勝町に住むようになった。10年間空き家で草ぼうぼうだったこの古家をどうにか住めるように修復し、17年間暮らしている。

## 文化や言葉の違いを超えた繋がり

「一番好きだったのは囲炉裏を囲んで、お湯が沸くの待ちながら、そのゆっくりと流れる時間のなかで、時を分かち合うことでした。場所から場所へ急ぎ、10秒後には別のことをやっているようなアメリカの生活では難しいことです」と、ビジネスコンサルタントのカルメンさんは語る。

ラジオ番組を担当するカミーラさんは「人は多くものを追いかけすぎ、心が空っぽになっています。彼の暮らしを見ると、生活に必要なものがどれだけ少ないのかがわかります。彼のようにはいかないが、私達でも到達できる心の安らぎを見つけたような気がします」。

NPOで働いていたレベッカさんは今は人生の転換期。この旅で「人生を変え、スローに生きていくことに確信がもてるようになった」という。雑用で多くの時間を費やす中村さんの生活も、「彼の芸術と思想を高めるための有効な時間」と理解している。

魂から絞り出るような歌声を持つサムさんはもっとスピリチュアルな面に触れる。

「言葉も文化もしらないこの国で、しかも他の参加者とは外見も違う自分が受け入れてもらえるのだろうか」と最初は不安で一杯でした。でも、『繋がり』を感じる事ができたのです。万物と繋がるために自分はそこにいるんだと感じました。中村さんとの出会いもこの繋がりを深めてくれました。彼は物理的には他の人と切断されていますが、こうして、たくさんの方が彼を訪れます。彼はマグネットとなって、私達を引き付け、手を差し伸べてくれました。繋がりがあるからこそ、私達は彼の元に集まったのでしょ」

彼らは活発に議論をかわしたわけではない。言葉の壁を超えた空間で対話したのだ。彼らの思いを読み取るかのように中村さんは言う。「シェルパの生活を見てこういう風な生活もあるのかと、私が思ったのと同じように、後の人生である決定をしなければならぬ時に、一つの選択肢として考えてもらえればいい」

ツアー後、「忙しすぎて書く時間を十分に与えられなかった」とアンディさんは反省する。しかし、参加者は言葉では表せないほどの大きなものをアメリカまで持って帰った。

日本での体験がこれからの執筆にどう影響してくるのか、そして、個々の生活にどのように生かされるのか。答えはあわてなくともよい。中村さんに教わったように時間は自分でデザインする。しかも、ゆっくりと流れる時間をだ。

Text by : Jun Moto

中村さんの家はその粗末な造りにもかかわらず、きちんと整理整頓され、清潔で居心地が良い。台所にはハーブや調味料などの瓶が理科の実験室のように並び、すぐ横はキッチン・ギャラリーのスペースで、中村さんの作品が展示されている。

オルターナティブ・ライフの先駆けでもある陶芸家、渡部愚風堂さん。赤い土に白い泥をまいて焼く「粉引」と呼ばれる手法の茶碗でお茶をいただく。茶菓子は奥さんの厚子さんが作ったジンジャーとくろみの入った巻柿。アンディーさんもここでお茶をご馳走になった。

「ゼロ・ウエスト宣言」で環境保護に取り組む上勝町。

